



vol.

8

児童福祉研究 第8号

いっしょに子育て



学校法人
和泉短期大学

目次

contents

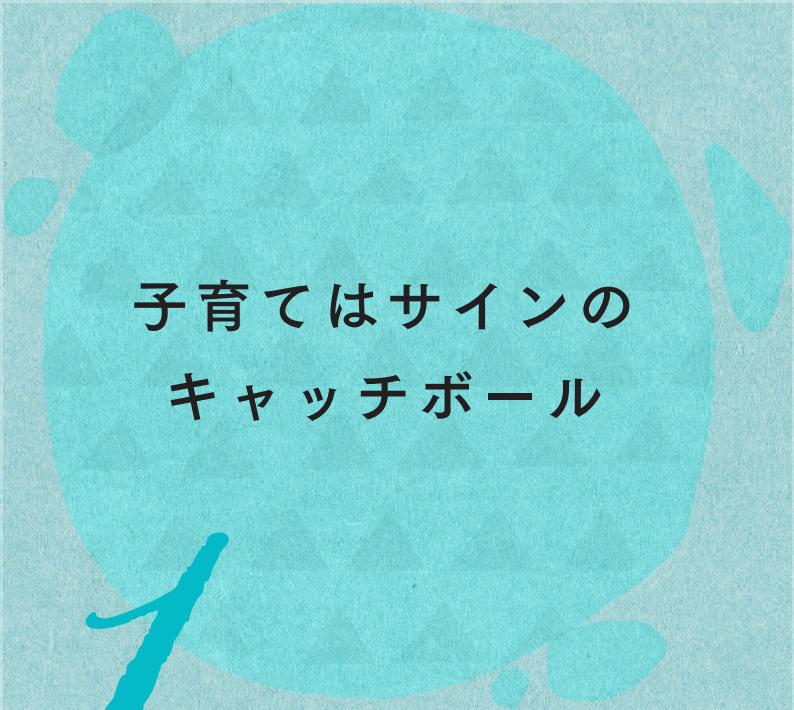
- 1 予育てはサインのキャッチボール
学長・特任教授 佐藤守男 1

- 2 乳幼児の遊び行動の究極の目的とは
—リトミック活動「音楽的刺激による創造的表現遊び」
を通して培われるもの—
特任教授 武石宣子 9

- 3 こどもをまんなかに、みんなで育ち合う地域社会へ
専任講師 星 早織 19

- 4 誰の気を済ませますか?
助教 杉田美香 27

- 5 キャンパスだより
准教授 中野陽子 33



子育てはサインの キャッチボール

学長・特任教授

佐藤守男

Morio Sato

和

泉短期大学の学長に着任したその年、私は待望の第一子を授かりました。春の穏やかな季節のなかで、医師から妊娠を告げられた瞬間の胸の高鳴りは、今でも鮮明に覚えています。何度も妻のおなかに手を当てては、「本当にここにいるんだろうか」と半信半疑のような、でも確かに命の気配を感じる不思議な時間でした。二人で名前の候補を紙に書き出し、まだ見ぬ我が子に思いを馳せる日々。職場では学長としての新しい役割に戸惑いながらも、「おなかの子が見ている」と思うと、自然と背筋が伸びました。

出産の瞬間を迎えたときの緊張と感動は言葉では言い尽くせません。分娩室で妻の手を握りしめ、必死に声をかけ続けながら、父親になる実感が少しずつ押し寄せてきました。産声が響いた瞬間、胸の奥からあふれ出したものは涙でした。初めて腕に抱いた小さな身体の重みは、驚くほど確かな存在感を放っており、「これからは自分が守っていかなければならない」という責任感と、「生まれてきてくれてありがとう」という感謝の気持ちが同時にこみ上げました。父親としての一歩は、その温もりと重みから始まったのです。

しかし、その喜びに満ちた時間は、やがて別れの準備とも重なっていきます。2016年7月、母を天国へ送りました。母は生前、「私と孫が入れ替わるのはいやだわ。孫に会いたい」とよく口にしていました。その言葉を聞くたびに、私は「大

丈夫、きっと会えるよ」と笑って返していました。願いどおり、母は孫を抱き上げることができました。そのときの母の笑顔——まぶしいほどの満面の笑み——は、今も写真の中で輝いています。母の頬に寄せられた小さな頭。重さを確かめるように腕に抱くその姿は、愛情そのものの形でした。あのとき、母に孫を抱かせてあげられたことは、私にとってかけがえのない慰めとなっています。

振り返れば、医学の進歩によって出産年齢は高まり、寿命も延び、人間のライフサイクルは確かに変化してきました。結果として、私のように育児と介護が同時に訪れる「ダブルケア」の時期を経験する人も少なくありません。育児は命を育てる営み、介護は命を見送る営み。どちらも人として避けることのできない通過点です。しかし、それが同時に重なるときの心の揺れは、経験して初めてわかるものでした。赤ちゃんの泣き声に飛び起き、夜中にミルクを作る日もあれば、翌日には病院で母の体調を案じる日もある。生命のはじまりと終わりの両方を、ほんの数時間のうちに行き来する日々は、喜びと悲しみ、希望と不安が複雑に交差していました。

正直に言えば、その時期は心身ともに限界を感じることもありました。仕事では新しい役割を担い、家庭では新米の父親としての責任があり、さらに母の介護という課題も背負う。どうしても「自分一人では抱えきれない」と感じる瞬間が訪れます。しかし、そんなときに支えとなったのは妻の存

在でした。二人で役割を分担しながら「今日はあなたがミルク、私はおむつ」と声を掛け合い、育児の大変さも、どこか笑いに変えることができました。父親としての未熟さを妻に補ってもらい、夫婦で共に成長していったあの時間は、今振り返れば妻は私にとって戦友であり、宝物でもありました。

そんな折、息子が生まれたときに、私たち夫婦が尊敬する大谷リツ子先生から、心に残るお手紙をいただきました。封筒を開けると、整った文字でこんな言葉が綴られていました。

「○○君の笑顔、本当にかわいいですね。こちらまで何もかも忘れてニッコリしてしまいます。自分の子どもの時も、孫の時もそうでしたが、赤ちゃんってなんとかわいらしく存在なのかと感動しました。これからしばらくは育児で大変な

こともあるかと思いますが、しっかりかわいがって、ご両親の十分な愛情で○○君を包んであげてください。育児の基本は、充分な愛情だけだと私は思っています。」



その言葉は、新米の父親として右も左もわからない中で、まるで心に温かな毛布を掛けてもらったような

安心感をもたらしてくれました。初めての育児は、想像以上に戸惑いと不安の連続でした。泣いている理由がわからない夜も、熱を出した日も、ほんの数時間前までの自分の判断が正しかったのか迷う日もありました。そんなとき、大谷先生の「充分な愛情だけでいい」という言葉は、余計な力を抜いてくれる魔法のようでした。

お手紙のなかで先生は、ご自身の経験も語ってくださいました。長女を育てていたとき、たくさんの育児書を読んだそうです。しかし、赤ちゃんは一人ひとり違うため、本のとおりにはいかないと気づいたといいます。「赤ちゃんをよく見守っていれば、何をすればよいのかわかる」と思い、本から少し距離を置き、目の前の赤ちゃんの発するサインに応えることに専念されたそうです。

そして、忘れられないこの一節。

「子育てとは、子どもが送ってくるサインボールを上手にキャッチし、上手に返すキャッチボールです。親が勝手にボールを投げるのではなく、子どものサインに応えることが大事なのです。」

私はこの言葉を、心の中で何度も反すうしました。赤ちゃんの泣き声、笑顔、手の伸ばし方、まばたきの間隔——それらすべてが小さなサインであり、そのボールを受け止め、返すことが私の役目なのだと。たとえこちらが疲れていても、

そのボールは一方的に投げ返すのではなく、相手の速さや形に合わせて返す。それが「応える」ということなのだと、少しづつ理解していきました。

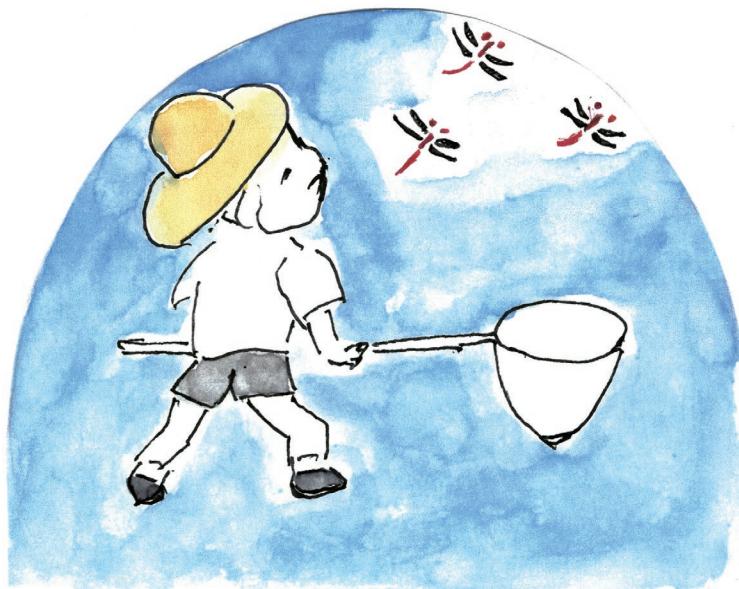
改めてお手紙を読み返すと、児童福祉の専門家である先生も、ご自身の子育てでは迷い、悩みながら、常に新鮮なまなざしで子どもと向き合っていたことが伝わってきます。専門的な知識や経験があっても、目の前の子どもは「はじめての存在」であり、その関わりは一回限りの時間の連続です。その真剣さが、先生の言葉の端々に宿っていました。

情報があふれる現代は、便利である一方、親にとっては迷いの種も増やします。インターネットやSNSでは、さまざまな子育て法や正解らしき意見が飛び交います。けれども、どれほど情報があっても、それが我が子に当てはまるかどうかは別問題です。だからこそ、「目の前の我が子をよく見る」「サインを感じ取り、愛情をもって応える」という原点に立ち返ることが、大切なのだと思います。

息子も成長し、最近では自分の気持ちを言葉にできるようになってきました。けれども、まだ言葉にならない感情や、うまく表せない思いはたくさんあるはずです。その小さなサインを見逃さずに、これからもキャッチボールを続けていきたいと思います。たとえ私が少し不器用な返球をしてしまっても、何度でも投げ直せる父親でありたい。そう願いなが

ら、今日も息子と向き合っています。

そして、私が学んだ大切なことは、子育ては決して一人で背負うものではないということです。家族や地域、仲間とのつながりの中で助け合いながら進める営みです。社会全体が子どもを育てる環境を整えることが、これから時代ますます重要になっていくでしょう。私自身もまた、父親として、教育に携わる者として、その一端を担っていきたいと強く願っています。



学長

佐藤守男

学歴 愛知県立藝術大学大学院美術研究家彫刻専攻卒業
美術（彫刻）

担当科目 造形表現（学長になっても授業を担当）

経歴 国展（新人賞・新海章）

昭和会展（優秀賞）

紺綬褒章

和泉短期大学第8代学長（小学生の子育て真っ盛
り！）



乳幼児の遊び行動の 究極の目的とは

— リトミック活動
「音楽的刺激による創造的表現遊び」
を通して培われるもの —

特任教授
武石宣子
Nobuko Takeishi

はじめに

乳幼児の遊んでいる姿を観察していると、生活のすべてが遊びであるといわれる一端を、そこに見ることができます。また、単なる遊びごとに終わるのではなく、それは真剣そのものであり深い意味を、そこに感じることができます。

遊びに見る自発的活動の中で、乳幼児は多くの身体活動・精神活動の経験を積み重ね、人間としての成長過程を歩んでいるのです。

I. 遊びの根底にあるもの

乳幼児の遊びは、おとなのそれら多くが意図的で計画的に展開されることに比べ、衝動的で偶発的な身体表現で行われることが多くあります。また、遊びによる自らの主体的な環境への参加は、乳幼児の意欲を増す重要な源泉でもあります。

遊びの特性を基本として、保育・教育するにはどのような条件そして環境が必要か、乳幼児の現実生活における主たる活動は何かを、問いかけながら真髓に迫りたいと考えます。

①運動機能向上につながる表現遊び

運動機能は人間のすべての行動の基礎です。そして運動機能は筋肉活動と神経組織の発達の総合関係にあります。乳幼

児期ではそれに必要な神経組織の機能はまだまだ未熟です。形態的に脳重量は神経系に属し、他に属する臓器より発育は進み、相当早い時期に成人の値に近づくとされています。しかし機能も成人に近づいていることを意味しているのではありません。

乳幼児の神経や筋肉は、表現活動を通じ刺激を受けながら少しづつ発達します。乳幼児の筋肉は小さいが同様に筋肉量も少ないのでなく、脳が支配する感覚機能のコントロールがスムーズに成就されていないために、調整能力が低く抑えられているだけなのです。

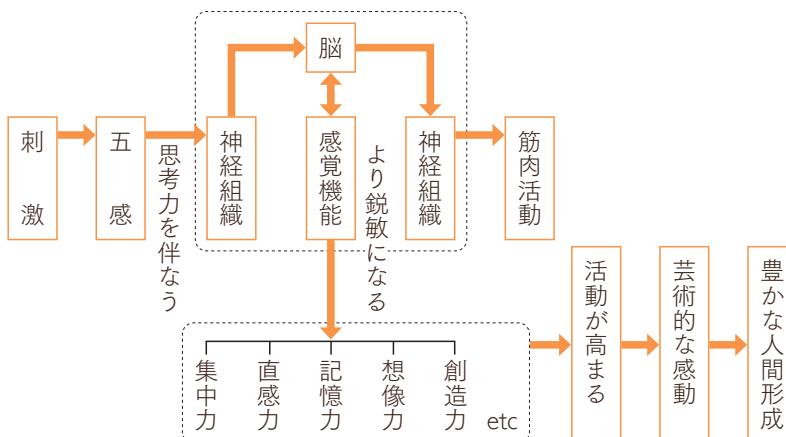
そこで乳幼児期の表現遊びの指導プログラムには、発達時期の早い神経系に重点を置くことが望まれるのであります。このことに着眼したのが、乳幼児期に展開される『リトミック』活動なのです。

② リトミック活動 「音楽的刺激による創造的表現遊び」

音楽意的刺激を媒介とした身体表現は、神経組織を通じ求心的に神経中枢に伝達され脳機能が高まります。その直接の行動器となる筋肉による意思実現が、敏速かつ正確に行われるには、神経組織と感覚機能の連絡が充分満たされているかに係ってきます。感覚機能は活動することによって本来の能力が呼び起こされ、同時に神経組織も働かせることによって高められるのです。乳幼児に色々な音楽的刺激による創造的表現遊びをすることにより、高まる諸機能を次に挙げてみます。

- a) 緊張と弛緩のコントロール
- b) 精神的集中力および記憶力の発達による身体の自動性
- c) 創造能力の開発
- d) 感覚機能の向上と芸術的感動の結びつき

感覚機能が高まると思考と行動が一体化し、経験と記憶力・直感力と集中力・自動性と意識的活動・想像力と創造力など、自然的な因果関係による現象が完成されます。そこには豊かに感じ取る能力——感受性——が感情の動きに付随して、心の動きをも奮い起こされるのです。そして遊び行動の究極の目的でもある『豊かな人間形成』に結びつくのです。



武石宣子著：「たのしいリトミックレッスン」より

以上のパターンを重要視した『リトミック』活動は、乳幼児の感覚機能を高めるために大変意義のあることです。

2. 創造的表現遊びの実践プログラム

——将来保育者になるであろう学生が、乳幼児の豊かな育ちへの援助と指導ができるよう、工夫をこらした授業内容の一部——

- 1) 1年を通して行う遊び (a. 即時反応 b. ドレミ体操 c. 名前の呼びかけ d. 基礎リズム)
- 2) サイレントパホーマンス (a. 6人～8人による月・星・魔法・飛行機・花・操り人形・ピアニスト・指揮者などのテーマによるサイレントパホーマンス b. ユートニー〈緊張と弛緩をコントロール〉)
- 3) 複リズムの体得 (a. どんぐり・大きな栗・オーシャンゼリーの3つの歌を合わせる b. オノマトペによる声の伴奏 c. 同時に2つ以上のリズムを体得 d. 連鎖動作・連鎖リズムの体得)
- 4) 素材を用いたプラスティックアニメ (a. 十文字技法によるプラスティックアニメ〈音楽：バッハ作曲ト長調のメヌエット〉 b. フープを用いてのプラスティックアニメ〈音楽：ブルグミュラー作曲無邪気〉 c. ゴムを用いてのプラスティックアニメ〈音楽：バージニア民謡アーメージンググレース〉)
- 5) カノンダンス (テーマ曲ごきげんよう): (a. 声で合唱 b. 声でカノンによる合唱 c. 声でカノンによる合唱及び身体表現によるカノンダンスの融合)
- 6) ネイチャーゲーム (a. サウンドマップ b. 色あわせゲーム c. 記号あわせゲーム d. ネイチャーチャイルドピンゴ e. ネイチャー

チャイルド木のカード **f.** カメラゲーム **g.** 私の木etc.)

- 7) リズムフレーズのステップ (**a.** クラップ 〈声オノマトペ〉
b. ステップ 〈声オノマトペ〉 **c.** 指揮+ステップ 〈声オノマトペ〉)
- 8) わらべうたによるオノマトペカノン (4拍遅れ・2拍遅れ・1拍遅れ): (**a.** ほたる **b.** てるてる坊主)
- 9) 名言から学ぶ (**a.** 〈手塚治虫〉 **b.** 〈金子みすゞ〉 **c.** 〈サン・テグジュペリ〉 **d.** 〈ルソー〉 **e.** 〈マザー・テレサ〉 **f.** 〈ライホールド・ニーバー〉 **g.** 〈新渡戸稻造〉 **h.** 〈副島ハマ〉 **i.** 〈板野平〉 etc.)
- 10) improvisation (即興): (**a.** グリッサンド **b.** 2音列 **c.** びっくり音 **d.** 魔法のメロディー **e.** のこぎりザメ現れる **f.** 忍者の足音 **g.** ゼンマイ人形 **h.** ドレミ体操 **i.** 子守唄 **j.** 7の和音 **k.** 雪の音etc.)
- 11) 創作ダンスの発表 (となりのトトロ): (**a.** プロローグ→メイン I → メイン II → エピローグ **b.** 体型 〈V・O・◎・X・・==・△・□・+ etc.))
- 12) 手遊び (**a.** 三矢サイダー **b.** お弁当箱 **c.** ひげ爺さん **d.** パン屋さん **e.** でんでんむしこだ **f.** ポテトチップス **g.** カレーライス **h.** ピカチュウ **i.** 後出じゃんけん **j.** メロンパン **k.** 山小屋一軒 etc.)
- 13) 指導法 (**a.** 年間を通して常にこなう課題 **b.** 基礎編 **c.** 応用編 (教科書リトミックレッスンより))

3. 実践プログラムを展開する教育者としての心構え

——私の最も尊敬する2人の恩師の教えから——

今からおよそ50年前アメリカ独立200年祭の年（1976年<因みに来年2026年は独立250年祭の年>）に、私はニューヨークのダルクローズ・リトミック音楽学校の、6週間に亘るリトミックサマースクールを受講いたしました。校長シュスター先生の『ホスピタリティとアイスブレーキング』についての講座を受けたことが思い出されます。ホスピタリティーとはおもてなしのテクニックであり、アイスブレーキングとは凍りついた心を溶かすとか碎くという意味を表します。シュスター先生は一貫してこう述べていたことを記憶しています。「素晴らしい指導者は対象者の前に立ったとき、何もしなくてもそばにいるだけで相手の心をホットさせ、心を開かせ安心感を与えるのです。あなた達は今後リトミックの指導者として活躍されることでしょう。しかし、指導することは、100の内90がホスピタリティーの精神でありアイスブレーキングの技法なのです。専門のリトミックの純粋な内容は100の内10程度で充分なのです。」と、熱弁されていたことを今でも鮮明に覚えています。25歳の時でした。その頃、実践・技術・即興のテクニック向上のことばかりしか頭にありませんでした。今ようやく真の意味が理解できるようになりました。

もう一人私の大切な恩師、副島ハマ先生との忘れることのできないエピソードがあります。私は今年で和泉短期大学の

教員49年目を迎えました。49年前、何一つ業績のない教員生活ぴかぴか一年生のとき、先生からの印象的なお言葉は衝撃でした。「あなた、音楽をおすてなさい。音楽そしてリトミックをこんなに専門に学んだのですから、音楽を捨てても充分あなたは音楽的ですよ。保育現場では幼児に高度な音楽など必要ありません。広い学びの中での音楽はほんの少しだけよ。いつもそのことを頭の中に入れて指導を考えなさいね。」と。私は教員になり学生にあれもこれも教えたいと、技術ばかり考えていました。幼児たちには引き出す指導ではなく、こちらから与える指導ばかりを考えていました。しかし、教員になった最初にこのお言葉を拝聴いたしました。私の指導は180度変化いたしました。この出来事がなければ、音楽中心の狭い指導法の中で満足していた教員であったかもしれません。また先生は「いつも喜んでいなさい」「何事も感謝」「人の後ろから歩みなさい」「子どもにいつも接しているさい」「子どもから学びなさい」と、ことあるごとに回りの皆に述べ伝えていました。先生に出会わなければ、今の私はいません。『保育の心』をご教授いただいた、偉大な副島ハマ先生と短い時ですがご一緒できたことは幸いでした。

おわりに

どんなに優れた教育メソードを熟知しても、また技能・技術を身につけても、実践プログラムを展開するには、対象者と指導者との人格の触れ合いの中を通り、営まれることから

始まります。特に、乳幼児は自らの『心の内』に届く豊かな経験を続けることにより、自己肯定力そして頑張る力を育むことができるのです。人に感動を与え、人の心を動かすような指導者に近づく努力を、一生をかけて歩み続けたいと思います。



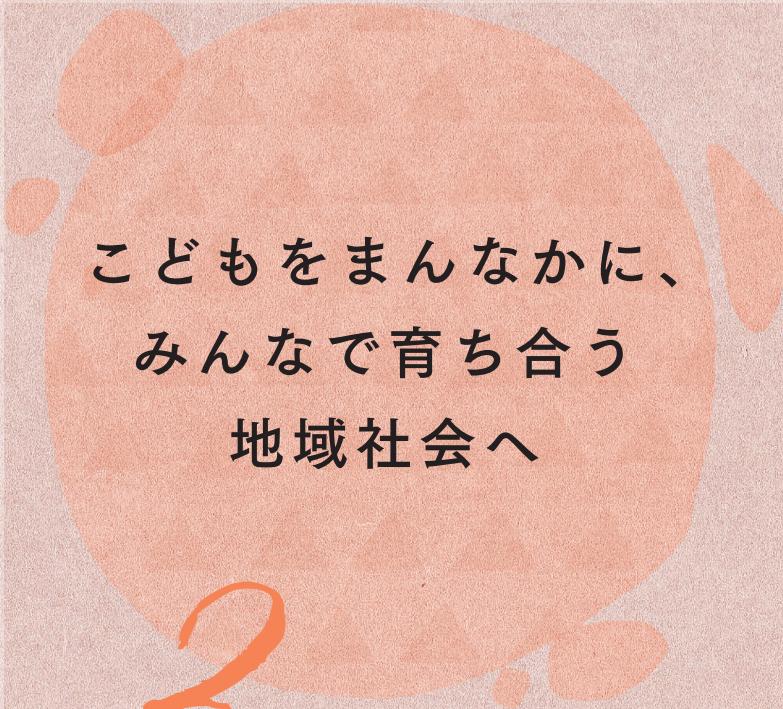
K.H.

児童福祉学科 特任教授

武石宣子

学歴	国立音楽大学（リトミック専攻）卒業 国立音楽大学大学院音楽研究科修士課程（音楽教育専攻）修了（芸術学）修士
専門分野	リトミック・音楽教育・音楽表現・身体表現
担当科目	リトミック
経歴	和泉短期大学児童福祉学科専任講師・准教授・教授を歴任 洗足学園音楽大学講師 桜美林大学講師 日本女子体育大学講師
現在	和泉短期大学児童福祉学科 特任教授
著書	「たのしいリトミックレッスン」単著 共同音楽出版社 「創造性を高めるプレイワーク」単著 相川書房 「子どもの運動教育の理論と展開—Eurhythmics（リトミック）教育の源流をめぐって」単著 共同音楽出版社 「リトミック教育—理論と実践—」単著 相川書房 「動きのイメージが広がる保育現場のための音楽表現＆弾き歌い」単著 共同音楽出版社 その他単著、共著、論文多数
社会的活動等	学校法人和泉短期大学 理事 学校法人和泉短期大学 内部監査室長 社会福祉法人相模原市社会福祉事業団 理事長 社会福祉法人さがみ愛育会 理事

「音楽人となる以前に豊かな人間を育てる」をモットーに、対象者に芸術的な感動を与え身体的表現への興味や意欲を呼び起こす指導に、情熱を燃やしている昨今です。



こどもをまんなかに、
みんなで育ち合う
地域社会へ

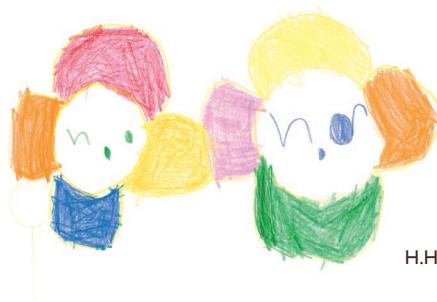
3

専任講師
星 早織
Saori Hoshi

子

育てには、喜びもあれば悩みもあります。その歩みは家庭の中だけで行われるのではなく、地域や社会も共に寄り添うこと、さらにはそこに学びの場が加わることも大切なのではないかと考えます。こども家庭庁は「こどもまんなか」をスローガンに掲げ、さまざまな施策づくりを進めています。こどもや若者の声を反映することと同時に子育て当事者やそれを支える方々の声を聴き、共に成長していく社会を目指す——これは、和泉短期大学が大切にしてきた理念とも重なります。

本学では子育て支援の一環として地域の方々に学内のキャリアデザインセンターを開放し、子育てひろば「はっぴい」「すまいりい」を開催しています。そこでは、こども達がのびのびと遊ぶ姿や、保護者の方が安心して話せる時間が生まれています。また、学生達は授業や空き時間を利用して子育てひろばに参加し、こどもや保護者の方々と直接関わらせていただいている。



学生にとって

こどもや保護者の方々との直接体験はかけがえのない学びとなります。授業だけではわからない子どもの姿を目の当たりにしたり、保護者の方々の子育てへの思いを感じたりして

います。例えばこのような事例があります。

こどもと接する時、一生懸命がゆえに自分のしたい関わりが中心になってしまふ学生の姿がありました。そんな時、こどもは素直に「NO」を表現します。周りにいる先輩学生や教職員は、こどもの気持ちを代弁しその思いについて共に考えていきます。その様子をみた学生は次第にこどもと関わる際には一呼吸おき、まずはこどものことをよく見て、何を感じているのかをよくよく考へるようになりました。自分の行為を振り返り、次はどうしたらいいかと試行錯誤する姿です。

このように、子育てひろばで過ごす時間は学生自身の感受性を育み、将来の保育者としての姿勢を形づくる大切な経験となります。多くの学生が「こどもに育てられている」と実感するのもこのような場面においてです。こうした関わりを通して、学生もこどもをまんなかに置くことの意味を体感しています。

中学生・高校生にとって

また、本学は地域に開かれた身近な大学として、地域の方々に大学教育に触れる機会を提供するとともに、小・中・高校生に向けて保育の魅力を発信する取り組みを進めています。2024年度からは子育てひろば「はっぴい」において、中高生を対象とした保育体験を実施しています。こどもと触

れ合う体験は、将来の進路を考える若者にとって大きな学びの場となっており、回を重ねるごとに参加希望者が増えています。2025年8月の時点では、14回の開催でのべ87名の生徒さんがご参加くださいました。

参加者の声をいくつかご紹介します。

- 初めてこどもと関わるのでとても緊張した。「こどもの目線に合わせる」ことを意識してみたら目が合ったことをきっかけに一緒に遊ぶことができた。とても嬉しかった。
- 幼稚園でのボランティア体験はしたことがあったが、親子で過ごす場面に関わるのは初めてだった。保護者の方とこどもの話をすることができて、親の気持ちが少しあわかった気がした。
- 子育てひろば終了後に、先輩達の振り返りの会に参加した。先輩達が大切にしていることや考えていることを聞いてすごいと思った。自分も早く保育を学びたいと思った。

体験を始める前は緊張した表情の生徒さんも、こどもと関わる中で自然とよい表情になっていきます。こどもや保護者の方に笑顔を向けられたり、「ありがとう」と言ってもらったりする体験は、自分が社会の中で役に立つ存在だと感じる大きなきっかけにもなっているようです。

保護者の方々にとって

中高生や学生にとって、保護者の方々との関わりは大きな刺激となります。それが子育てひろばで保育体験を行う意味になっているように思います。

また、保護者の方々にとっても新たな視点をもたらしているということに気づきました。中高生や学生へこどもの関わり方についてのアドバイスや子育てのエピソードをお話しくださる姿があります。このような関わりは子育てにおいては「支援される側」であることの多い保護者という立場が、若い世代と接する中では「支援する側」の役割を担ってくださることです。世代を超えた学びと育ち合いがそこに存在していることを強く感じます。

「こどもまんなか」社会の実現に向けて

保育体験がスタートして、私たち教職員側が気づきを得ることも大変多くあります。こどもがいるからこそ、地域の中で世代を超えて互いの成長を支え合うことが可能になるのだ実感しています。

これからも本学は「こどもまんなか」社会の実現に向け、地域の子育てを支える拠点として、共に学び合える場を開いていきたいと考えています。これからも皆さんと共に、多くの経験を積み重ねていけることを願っています。

【参考】

こどもまんなかアクション こども家庭庁

<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-mannaka>



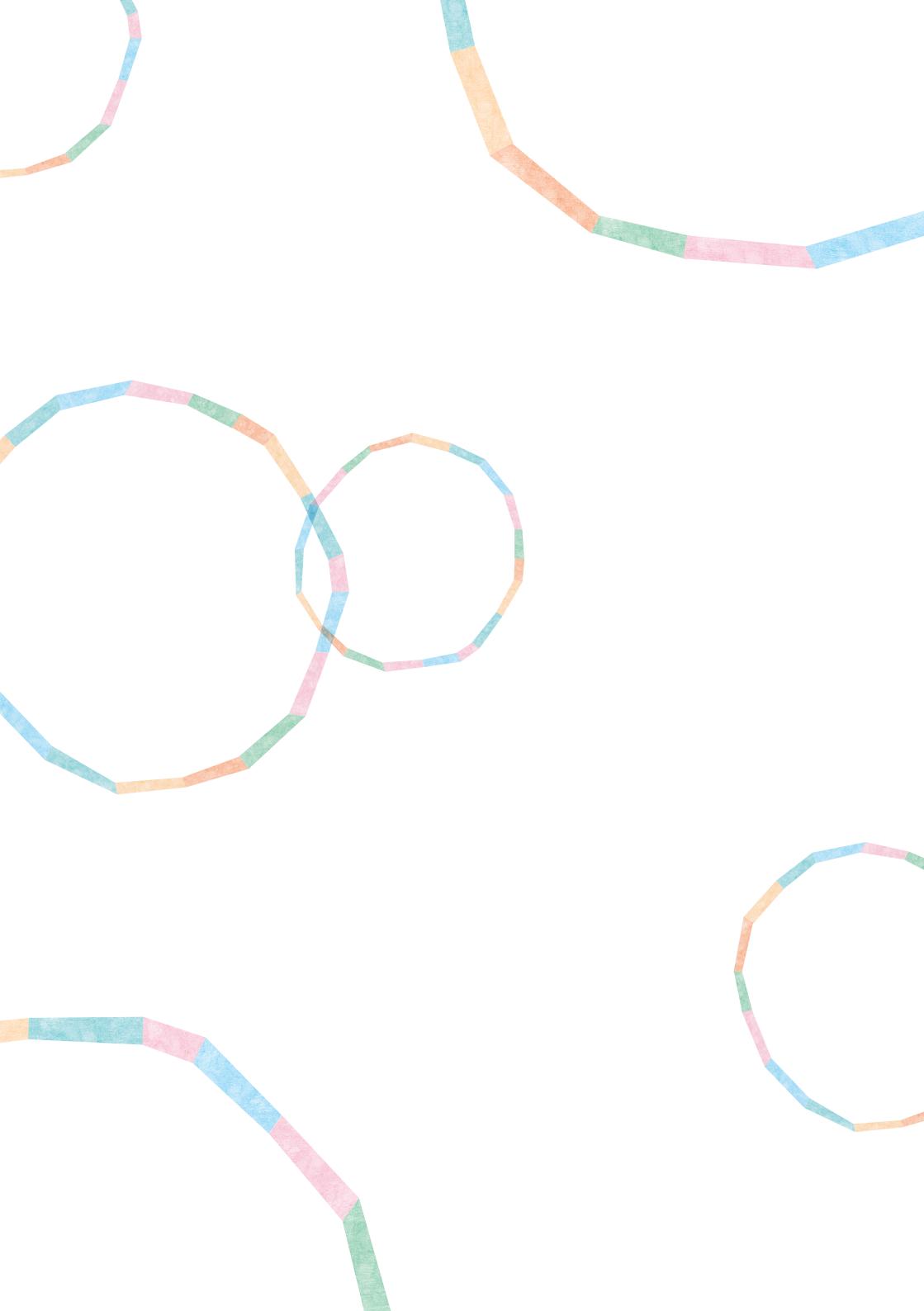
児童福祉学科 専任講師

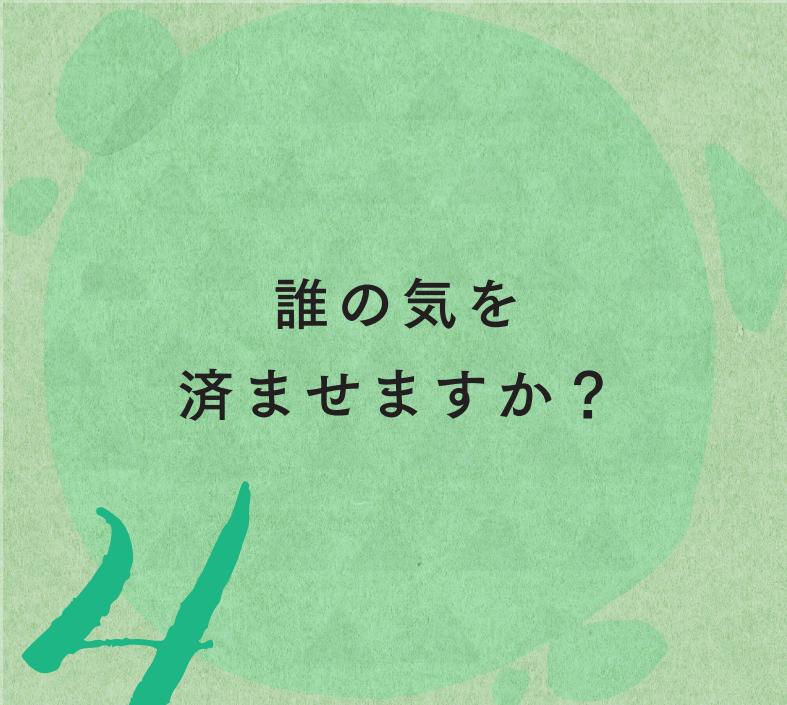
星 早織

- 学歴 明星大学大学院教育学研究科教育学専攻 博士前期課程修了（教育学）
- 職歴 幼稚園教諭、保育士、社会福祉士
- 担当科目 乳児保育Ⅰ・Ⅱ、子どもの健康と安全、実習指導等
- 経歴 公立保育所保育士を経て現職。保育現場のリアルや自身の子育て経験を活かし、保育の魅力を後輩となる学生達や地域の皆様に届けられるよう日々努めています。



H.H.





誰の気を
済ませますか？



助教
杉田美香
Miki Sugita

い

ちばん大切にしたいのは「子どもが、まず自分で見て、知って、やってみたいことをみつけて、満足するまでそれをやってみること」。これが、幼稚園教諭として20年ほど経った私が、大学を卒業して2年目のB先生と二人で担任した、新設の年少・3歳児クラスで目指した保育でした。

一日に一度はクラスや学年で集まって何か経験をしようという方針の園でしたので、その集まりの時間も、大切にしたいことを意識しました。年中組が絵の具で遊ぶ日に、子どもたちとその年中組の部屋に見に行くことにしました。3歳の子どもの声は「何をしているの?」「きれいだね」「あれは絵の具っていうんだよ!」といろいろでした。自分たちの部屋に戻ると、「やってみたい」「年中さんと同じことしてみたい」という声が聞こえ、「みんなもやってみたいの?」と私が問うと、「やりたい!」と元気な返事。絵の具遊びの準備は前日に全てしてありましたが、私は敢えて子どもたちに、絵の具遊びに必要なものは何かを聞いて、「今すぐに…できるかな」「年中さんから道具を借りてくるね」と言い、「絵の具で遊べそう」と話すと、歓声が上がって、好きな色を選んで思い思いに紙に描き始めました。

やる気を引き出せたかなとB先生と笑顔で絵の具の補充などしていましたが、全員が取り組んだ訳ではありませんでした。A君は絵本棚のところで遊んでいました。「A君、やってみる?」と誘うと首を振りました。その後、「どんな色が好き?」などと言葉を変えて声を掛けた後も、絵の具に触れ

ることはありませんでした。

翌日。「先生、昨日のアレ、やりたい！」と登園するなり複数の子どもから声が出て、待ってましたとばかりに用意しておいた絵の具を出しました。その人数はどんどん増えて、最初はひとつの机で始めた絵の具遊びは、机を6つほど繋げる賑わいとなり、20人のクラスのうち、8割ほどが筆を手に取りました。

その絵の具を楽しんでいる面々に、A君が何か話しかけています。耳を澄ますと、「上手ね」「いいね」と一人ひとりに言って回っていることがわかり、B先生と思わず顔を見合させました。無理強いはしないと決めてはいたものの、A君の心にはどう映っていたのでしょうか。もしかすると、苦手意



識などがあって自分は取り組めない、でも他の友だちは翌日もしている、普段から穏やかでやさしいA君ゆえ、皆を認める声をかけていたのでしょうか。いっそ「みんなでやってみましょう」という言葉があった方が良かったのではないか、子どもがやりたいというからやっている、その方向に子どもを動かせたという傲慢な気持ちが、私にあったのではないかと気づかせてくれました。その数か月後に文化祭（絵画系の作品展）を控えており、水彩画に取り組んでもらいたいという保育者側の勝手な都合も含まれていたことも事実でした。いわゆる一斉保育、皆で同じことをするという難しさ、保育者としての在り方を改めて考え直す出来事でもあり、以来、「全員がやった」「皆が喜んで活動した」というように見受けられる時、気が済んだのは、子どもなのか、または保育者なのか、立ち止まって考えるようになっています。

幼稚園から大学まである組織でしたので、同一敷地内にある大学の卒業式に2025年3月、B先生と出向きました。そこにA君の姿があり、先の出来事や、友だちに対してのやさしさが忘れられず、「幼稚園の時、ありがとう」とお礼を言いました。A君は変わらずに穏やかに微笑んでくれました。

和泉短期大学の「はっぴい」という子育て支援の場には、その日の終わりに近づくと、学生が手遊びや絵本などをする時間があります。最初から学生に抱きつくほど楽しみにしているお子さんもいれば、違う遊びを続けるお子さんもあります。私は、そのどちらも、ありのままの姿であり、どちらがいい、悪いはないと思います。親御さんの立場からする

と、そんなに呑気なことを言っていられないと思います。参加しない場合には何か異常でもあるのではないかと心配される場合もあるかもしれません。お子さんがその気になるのを待つのは、かなりの辛抱を要することです。そんな時、心のなかでその姿を応援するとともに、勤務していた幼稚園の初代主事であった小林宗作先生の残された「子供は先生の計画にはめてはいけない、自然の中へ放りだしておけ。先生の計画より子供の夢の方がよっぽど大きいよ」※1、この言葉を思い出し、意味を考え続けています。

※1 佐野和彦（1985）『小林宗作抄伝』.話の特集.p103

小林宗作先生は、『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子さんの著書で1981年に講談社より発行されたもの）に登場する先生です。

助教

杉田美香

学歴

国立音楽大学音楽学部教育音楽学科幼児教育専攻
卒業 藝術学士
玉川大学大学院 教育学研究科教育学専攻乳幼児
発達コース修了 修士（教育学）

職歴

学校法人成城学園成城幼稚園専任教諭
財団法人幼児開発協会専任職員

専門分野 幼児教育学・保育学・子育て支援



学生の手作りによるボウリング



親子でサツマイモ掘り

和泉短期大学の子育て支援「はっぴい」の様子



キャンパスだより

5

准教授
中野陽子
Yoko Nakano





G

**和泉短期大学
児童福祉学科・専攻科の
学内の様子をお届けします**



H

A 第61回、第16回入学式が行
われました

B 1年生がお店屋さんごっこ
を企画、実施しました

C 学生の主体的な学びを大
切にした授業展開を行ってい
ます

D 沐浴演習を通じて、子ども
の健康と安全についての知
識を養いました

E 子育て広場「はっぴい」お
よび「すまいりい」を開催
しました

F 南相馬スタディーツアーが
実施され、災害時の現状や
保育について学びました

G ヒューマンケア専攻の授業
の様子です

H いずみ祭が行われました

I 卒業証書授与式が行われま
した



I

准教授

中野陽子

学歴 日本社会事業大学大学院 社会福祉学研究科社会
福祉専攻博士前期課程修了（社会福祉学）

専門分野 社会福祉学・障がい者支援

担当科目 特別支援保育Ⅱ、子ども家庭福祉、教育・保育相
談の理論と方法、実習・実習指導、社会福祉、障
がい者の生活支援（ヒューマンケア専攻科）
誰もが共に生きる社会を実現することの大切さを
伝えております。

経歴 障がい者施設 生活支援員7年

和泉短期大学 助教

田園調布学園大学 講師

を経て現職

和泉短期大学の卒業生としてたくさんの後輩を育
てていきたいと思っております。

いっしょに子育て 第8号

2025年11月30日 初版第1刷発行

発行人 児童福祉研究 編集委員

矢野由佳子・中野陽子・

星早織・田中孝一

発行所  学校法人 和泉短期大学

児童福祉研究室

〒252-5222

神奈川県相模原市中央区青葉2-2-1

Tel: 042-754-1133 Fax: 042-753-2087

Email: ijccw@izumi-c.ac.jp

<http://www.izumi-c.ac.jp>

印刷 有限会社 青史堂印刷

©2025 IZUMI JUNIOR COLLEGE

Printed in Japan

表紙絵：荒井万梨永（2018年度卒業生）

花言葉：黄色／ガーベラ「親子の愛」

紫／クレマチス「深い思いやり」

裏表紙絵：林田桂子

